

2010. 3. 19

# あんげろす

「潮」

柴田 有

漁師達の行動には、いくつかの習性がある。それを見ていて、興味をひかれることしばしばである。そのひとつに漁師の言葉がある。漁師は「潮(シオ)」という言葉をよく使う。特有の用語法になっているらしい。潮は海の言い換えと言っても差し支えない、と思う。海と潮とは血縁関係にある語だろうが、実際に漁師たちが使うのは、ずっと多く「シオ」なのである。

漁師は朝夕海を見に来る。日課と言ってもよい。風が強くて立っていられないほどの日に、小高い場所でじっと海を見ている。現役を退いた漁師でも、仲々その習慣はやめない。彼らは海の声聴いているのである。海という神々しい領域から響く、或る声が働きかけ、海と人との、海と生活との関わりが生まれるとき、潮という呼び方も生じる。それゆえ漁師はこの「シオ」という言葉をしょっちゅう口にするのである。

漁師達は「潮」の一語で実に多くのことを語る。その多彩な語義はプリズムによって生じる分光のようである。潮という一条の光から、意味の分光が多岐に放射する。例えば潮の速さ。潮の流れが速い朝は、定置の漁網に入った満杯の魚を海中から引き上げることができない。それから潮の色や潮の濁りと澄みも、潮の善し悪しつまり漁の善し悪しを示す徴候である。また潮の水温は魚の行動が活発かどうかの指標になるし、水温に応じて魚種が交代するのでもある。さらに潮の向き、潮の層、潮目も漁に直接関わる要因であるから、漁師達は鋭い観察と判断力を働かせることとなる。相



模湾の話をするれば、三浦半島から伊豆半島方向に流れる和潮と、もうひとつ、鹿島潮という逆向きの流れとがある。二つの潮は日によって交代することもある。どちらか一方が数日続いてから変わることもある。その向きによって魚種も変わることが多い。

オキギスという魚をご存知だろうか。(沖で獲れるキスという意味ではありません、念のため。)高級カマボコに使うギス科の魚で、カマボコ一本に一万円以上の値がつくこともあるらしい。今ではオキギス漁を手掛ける漁師がめっきり減っている。延縄(はえなわ)と呼ばれる漁法で獲るのだが、海仕事が相当にキツイ。オキギスは500米位の海底に住む魚で、深海のポイントを狙って仕掛けを下ろす作業が難しい。午前二時とか三時の真つ暗な海で、全長数キロもある仕掛けを投入していくのである。船体はゆっくりと進むが、風と潮の流れで影響を受ける。これが出来るかどうかは腕ひとつにかかっているのだ。漁師にとって潮を読むとはそういう仕事である。

潮が意味する内容は豊富であって、大潮、中潮、小潮などの潮回りもあり、さらにその日その日の干満が定まっている。これは月の満ち欠けと密接に対応して生じる現象である。漁師達の生活はそれに対応して変動するから、太陽暦よりは月暦に関わる面が強い。魚介類の行動は潮回りや干満に応じて明瞭な変化を示すからである。寒い季節に漁師が「二十日過ぎ」と言えば、旧暦のことで、つまり十五夜過ぎのことである。

三浦半島にはクサブリというマブグ科の魚が生息するが、その産卵期は五月下旬からの約二ヶ月間である。毎月新月と満月を起点に必ずその数日後の夕方、産卵行動が始まる。満潮時の二時間ばかり前に産卵が始まり、満潮時でぴたと終わる。四、五日後に海辺で孵化した稚魚が海に旅立てるように予定された、「神秘的な習性」なのだという。

海の舞台で展開するドラマに、季節の潮流の変化ほど心打つものはない。五月初旬黒潮が北寄りに蛇

行し、その影響が相模湾にも及ぶ頃、大磯の照ヶ崎にアオバトが飛来するようになる。飛来する群れが、日を追って大きくなるこの時期、潮にも活気がよみがえって来る。アオバトと示し合わせたかのように、魚の回遊が同期するのである。不思議に思うことである。だが毎年決まってそうなる。シラスを追ってアジ、ワカシが相模湾に乱入し、釣り人を狂喜させる。沖の定置網では一晩の内に、何トンというアジが網に入る。自然界の多声唱が力強く、時の変化を告げるのである。

また、秋の潮が入って来る九月頃、海面にせり上がるように、魚群の遊泳が出現する。この群れをナブラと呼ぶ。群泳は黒い帯を作り、ゆっくりと海を渡ってゆく。イワシ、サバ、イナダ、カツオ、ソーダカツオのナブラである。群れの内部で魚体がひしめき合い、自由に泳ぐ余地もなくなると、海面に浮き上がって泳ぎ続けるのだと言う。イナダやサバに追われるイワシの群れなど、それでも足りなくなると、さかんに海面で跳躍する。さらにそれを狙って、低空飛行のカモメが追跡する。

潮は流れ、波動し、循環しつつ、太古の時から海の生物を保全してきた。無数の生命が海で生れ、海から生れ、海によって生れる。それは潮という不思議な力の働く場なのである。漁師達はそのすべての様相を、「潮」の一語で呼び、括る。どうしてだろう。未だ知らぬ誰かの名を呼んでいるのだろうか。一人のたいなる母の名を。海の生命を生み、養い、力付け、包容する母の名を。子は母を呼ぶ、全き信頼を込めて。母と知らずに母を呼ぶ、幾度となく。漁師もまたそのように、一人の母の名を呼んでいるのであろうか。海という文字のなかには母がいる、と言う。世界の神話もまた、母なる海を語っているのだから。

第51号

2010年3月